



大学野球の名門、早稲田で躍動を目指す石津さん。福井市の高志高で

夢に向かて

頭脳プレーで恩返し

10歳の時に夢見た舞台にこの春から立つ。東京六大学野球リーグ戦で、最多タイの46回の優勝を誇る早稲田大への進学が決まった。伝統のユニフォームに袖を通し、明治神宮球場（東京）での躍動を掲げる18歳は「支えてくれた人たちに、いち早くプレーする姿で恩返しをしたい」と胸を高鳴らせる。（谷出知謙）

50呎を6秒5で走り、高校通算7本塁打を放ち、遠投は90呎を記録。走、攻、守ともにそのつ無のプレーが持ち味の中距離打者は、もうひとつ名刀を持ち合わせる。「頭脳プレーは高校生でトップクラス」と高志高の仲谷渉監督。捕手としては相手打者のしぐさを見て、裏をかけた配球を選択。走塁では相手の守備体系や捕球体勢の隙を突く、したたかさがある。

中学時代は硬式クラブ、福井嶺北リトルシニアに所属し、エースで四番として3年夏の県大会で優勝した。県内外の強豪校から声がかかった。甲子園に行きたい。でも、勉強も頑張りた。悩みに悩んでいた時、母のひと言が胸の奥底に閉まってあった情景を思い起こさせた。「六大学に行きたいんじゃないの」

小学校高学年の時、福井フエニックススタジアム（福井市）で行われた早慶戦を見た。両校とも得点の度に、応援歌の大合唱が起る姿に目を奪われた。「こんなにも盛り上がるのか」。1年後、父と一緒に明治神宮球場でリーグ戦を観戦。夢は決まった。「レベルの高い野球をやる。力をつけて大学でプレーしたい」。進学校の高志高は早稲田でプレーしたOBが多い。文武両道を目指し、門をたたいた。

1年夏からレギュラーで出場したものの、甲子園には届かなかった。選手としての力はぐんと伸びた。2年冬は土台作りに励み、3年春から0本だった本塁打を量産。自ら手を挙げて主将を務め、組織をまとめる難しさと勝利の喜びを味わった。

石津 智希さん（18） 高志高3年

早大進学 六大学野球でプレーへ

推薦入試で合格した早稲田大では、系列校や甲子園で活躍した選手との競争が待ち受ける。「日の目を浴びない時期もあると思う。それでも、自分なりに工夫して戦いたい」。意気揚々とバットを振った。